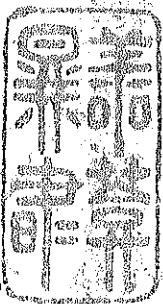


非支名勝志

秋田県
3-9
4

甲斐名勝志序

禹貢尚矣。自班馬之史。繼稱彬々者。無
不必志輿地。以爲之副焉。豈不以事與
物之所由係。而不可不詳也歟。夫以
本邦方文化之盛也。猶有風土之作矣。
自漢季之後。文物就晦。其井然紀六十



六州考。徒無而僅存焉。然亦罕見其全。
談者以為曹吏所抄摹。以資討閱者已。
理或然也。顧其僅存者。率屬朽蠹。雖閱
者。免滂漉。亦多訛謬。不足以徵。慕古
者。痛焉。且夫難以時流之奇。恒捐而無
陵谷之變。則有名傳而地闕者。有倂若

而堙沒者。言蹟之不可考。職以之由。門
人。歎元克為學。篤於慕古。茲標州之所
有。諸處乃致載籍之係於境者。與國風
詞彙所及者。無不附載焉。然其幸而不
泯者。如神祠佛寺。獨得彷彿於牲幣
時日。而辨劫灰於新碑碎瓦耳。蓋刑之

蘇為句根在昔。皇華之奉使也。一咏
沃茲山。而騷人之取途者。回顧詠沃。必
無不於是。而蘭署名公。卿托思想於藻
翰。若陸。掩映乎子秋。雖有金嶽之竄
竊。八嶽駒峯之峯。寧奇秀。無復能抗焉。
雖山川之炳靈。不得不頌人文。而見其

如是乎。而官衙府廷。治迹雖邈矣。尚以
窮鄉荒村。冒舊鼎。雖善。宜裁損。為文愈
泯滅。而無之知也哉。亦適足以觀。愚慙
之風也。自晚季。諸傑驚之。爭起。乃霸國
將畧。攻守勝敗之。張諸器械。斗斛貸賄
貢賦之法。出焉。用其放者。地區布穀。桑

麻蔬茹果蔬之壤。山箴羽毛齒角搜捕。
櫟樟之用。野分馴良嚙蹏之牧。而陰易。
燥濕。曉疇。飮饒。風氣所致。習俗。非一。而。
至於秉彛之性。果之可証。時有孝順貞。
操。而。國家褒葬之典。亦無有古今之。
異。乃茲生之所志者。凡其係茲州者。咸。

在焉。編成名曰甲斐名勝志。乃屬予序。
則歛衽曰。克以寡陋。故困於採訪。不能。
无挂漏。然亦不君難助之。唯予載之。予。
曰。生之此舉也。苟得為求古之一助。斯。
足矣。蓋不必旁及異搜。而後謂之志。又。
不必討究流變。而後謂之微也。遂以書。

其首云

天明二年壬寅三月

朝散大夫源光章撰

門人

天目源益之書



凡例

○此書凡四郡の勝槩を記す宮祠寺院ののり、大抵を載而已今總小存せしむるは故縁あるもの、悉く舉ぐる、余、故舉にせしむるあり、まこと不贅

○延喜神名式及風土記所載宮祠今嚴小存せしむる有、或、其蹤跡定らば、一の社号を載處は、是唱、來き、る、言、ら、ざ、り、と、も、あ、ら、は、れ、り、と、考、分、ち、か、ら、せ、し、む、傳、へ、きたる、ま、た、い、く、所、也、を、舉、ぐ

ナニノ...

國史所載宮祠授位階事有八位田を寄附する事あり所謂大井俣物部美和檜峯比志宇波刀等の神社あり令義解田藉部曰凡位田正一位八十町從一位七十四町正二位六十町從二位五十四町正三位四十町從三位三十四町正四位廿四町從四位十町正五位十二町從五位八町云々皆倣之

○風土記の全く傳はるる一説今所存風土記の偽書ありと云ハ誤あり一往昔民部省より風土記の中より見安のらんゝあに大際を抜書一する書

ある一朝野群載曰延長三年十二月十四日大政官符曰五畿七道諸國司應早速勅進風土記日本惣風土記六十余卷 元明天皇和銅の頃より集られり 醍醐天皇延長の頃全部を今甲斐風土記殘冊總ふ七八葉を存せしもの中少も不明ありきり事少ありす抄も郷名等和本鈔所載不異故小是を記す

○郡郷往昔小違處少ありはこ東鑑小貞應乃頃鎌倉執権北条氏六十余州庄郷を分ち大田文と

云書を作る意ハ此時郡郷往昔ハ遠一ハ今も昔も
一ハ今も昔も郡郷往昔ハ遠一ハ今も昔も

甲斐名勝志卷之一

萩原元克編輯

夫甲斐國ハ山嶽四方ニ連テリ郡郷其間隔リ甲斐ハ
峽の假字也倭名鈔峽ハ山間陝處俗云山乃加比ト
あれハ山のわしの意也名付テリ國の号也下峽ハ
也阿加同韻也通ず也風土記ハ分實日本紀ハ柯
彼續日本紀ハ歌斐トモ書リ皆假字カキテ又字
彙補出斐字曰日本有甲斐國見平壤録云
萬葉集ハ山のわしハ

古今集の楊を以てしむるはわりの山のひのくもを言ふ
あし皆山の河より言ふなり

一説は甲斐國の諸國は勝とて果の義の國あり斐
の字木実と讀字あり故木の字あり甲斐の字あり
少く甲斐と必付とて今字彙及止字通を以て斐
乃字木の字と訓すも義あり假令木の字と訓すも
甲斐の假字あり字よりの解とては無俗説の語也
甲斐國号既小日本紀景行天皇卷の思より又事紀
開代天皇卷曰沙本毗古王者甲斐國造祖也

舊事紀國造紀曰經向日代朝世狹穗彦王三世孫臣知津
彦公以子鹽海足尾定甲斐國造とて經向日代ハ景行
天皇之宮都也開代天皇之皇子ハ日子坐王也其子沙本
古王其子臣知津彦公其子鹽海足尾也

文武紀曰大寶二年四月庚戌詔定諸國國造之氏其
名具國造紀と云予按と景行天皇の御代より聖武
天皇天平の頃迄國造とて國政を執給へり
一坂草時之時以洲湖水あり時より神皇山を蹴裂水と
遷く故水潤洲とて後世以神を蹴裂明神と崇祀

予按に風土記市川郷春夏中土俗以竹網隨海磯待
 魚春而取之網取數百鮮云々とあるは頃也以邊猶湖水
 きりりといふより方々集オヤサ大王神ヤもいふ所のまじくお流ミラベとあるは
 此歌のまじく朝家の敷ミナタて河邊の頂山を穿ツカ巖を鑿ウ水を
 遊ウより村里田畠とハ如タし其事を因ツカ人の徳を稱ホして
 蹴キ裂レ明神と崇ホ祀リも下今巨麻郡川内領免鳴村柳川の邊
 蹴キ裂レ神の小祠有川内川落の轉マ路ありて傳名鈔ニ載郷名
 巨麻八代兩郡ともた川合郷有是今東西の川内領あり
 成教力紀曰五年今諸國以國郡立造長縣邑置ミヤコカサ稻置並賜

楠カ矛コ以為表則隔山河而ハカ國縣隨フ阡陌定邑里云々
 傳名鈔曰國府在八代郡行程上二十五日下十三日之
 予按尺國府ハ八代郡今の國衙ありて山利郡の國府
 ハ其後河邊の御代より遷ウり移ルりて今國府ハ往昔
 國司下向シ多クして國政を行ヒ給フ官解の在ル處あり

○國史所載甲斐國司凡舉云々

- 田邊史廣足 聖武天皇御宇天平之初
任甲斐國司既見予史
- 馬史比奈麻呂 聖武天皇天平
十三年任
- 坂上苜田麻呂 稱徳天皇
天平神護元年任
- 山口沙弥麻呂 孝謙天皇
宝字五年任
- 栗田鷹取 光仁天皇
宝龜三年任

山上船主

光仁天皇
天徳元年任

藤原内麻呂

桓武天皇
延暦元年任

紀豊庭

桓武天皇
延暦三年任

橘安凡

桓武天皇
延暦十年任

文室秋津

嵯峨天皇
弘仁八年任

藤原貞雄

淳和天皇
天長十年任

橘時枝

仁明天皇
承和十年任

小野貞村

文徳天皇
仁寿元年任

小野貞樹

文徳天皇
仁壽三年任

紀貞守

文徳天皇
齊衡三年任

佐伯真利

清和天皇
貞觀二年任

橘末茂

清和天皇
貞觀四年任

藤原弘道

清和天皇
貞觀八年任

清原長統

清和天皇
貞觀十二年任

高階菅根

清和天皇
貞觀十六年任

田口統範

陽成天皇
元慶二年任

藤原當興

陽成天皇
元慶八年任

橘喜樹

光孝天皇
仁和二年任

其後國史無事不傳藤原實政源賴信平範國

等甲斐守に任せし事漸後の書に見えり猶承久の

頃より一書一書生忠岑凡河内躬恒八目を任せ

し事古今集に躬恒甲斐國より送る事あり

抄に藤原時實の秋にあり旅經の

同集に小野貞樹甲斐守の時實より此の事ありとあり

人いふ事とて山由文に小野實の事ありとあり

其後武田氏當國を領するも久し今も其系を奉く

義光

伊予守賴義三男号
新羅三郎從五位下刑部
大輔大治二年七月廿
辛七十三歲

義業 佐竹之祖

義清

号武田三郎冬安
元年七月廿三日卒七歲

清光

号逸見太郎
黑源太正治元
年七月十九日卒

信義

号武田太郎文治
二年三月九日卒
五十九歲
加三美二節南郡
小笠原秋山等之祖

忠賴

一条三郎

信政

甲斐守

信時

伊豆守

遠光

加三美二節南郡
小笠原秋山等之祖

兼信

坂垣三郎

義定

保田遠江守

有義

逸見四郎

信經

一条八郎

時信

甲斐守

義遠

淺利興市

信光

石和五郎
淡名光蓮

寺綱

彈步羽

信宗

伊豆守
世孫賢

信武

甲斐守
号八幡寺

信成

刑部大輔
号雪窓院

信春

陸奥守

信滿

伊豫守
四年三月六日卒

直信

左馬頭
号換武田之祖

号長松寺

信重

刑部大輔
宝徳三年
十一月廿五日
号成就院

信守

刑部大輔
享徳四年
五月十日卒
号藤成寺

信昌

刑部大輔
永正三年
九月十日卒
号永昌院

信綱

刑部大輔
永正四年
三月十四日卒長興院

信虎

左京大夫
天正二年
年八十才

晴言

大膳大夫号波羅院機出信玄
天正元年四月十三日卒五十三歲

義信

武田太郎

信繁

左馬頭

信豊

左馬介

龍室丸

海野三郎

長延寺殿

信連

孫六入道
道邊軒

勝頼

伊奈四郎天正十年
三月十日自裁三十七歲

信達

一条右門

信盛

仁科五郎

信勝

武田太郎
圓入自教十六才

自高祖義光四百六十余年也

○延喜式所載租稅

甲斐國正稅公麻各二十四万束國分寺領二万束大安寺領
一万二千束支珠會料二千束堤防料二万束救急料八百束
俘囚料五百束凡五十三万五千三百束云大安寺者大和國
大安寺也
弘仁式曰上田一段地子十束中田一段八束下田一段六束
下二田一段三束云云
倭名鈔曰甲斐國田万二千四百四十九町九段二百五十八
步正公各二十四万束本稻四十九万八千九百三十八束雜
稻万八千九百三十八束五把五分云云

令義解曰凡田長三十步廣十二步為段十段為町

謂段地獲稻
五十束東稻

春得米五升即於
所者須得五百束

段租稻二束二把町租稻二十二束

謂田賦ヲ
為租

今令田籍部有畧云

文武紀曰慶雲三年九月丙辰遣使七道始定田租法

云云此御代ヲ制せられし事也

中古貫高云あり此事委しむる事也
信濃より伊奈郡北小河内村の村木河原の家は信所
古に善書し又りては渡りし色に今ある事也其谷曰天正年中
毛利氏檢地迄ハ一步を一文一畝を三十文一段を三百文一町を三

貫文と云下信濃國上田の邊と云今貫高と用所と云

○延喜式所載調庸之類

年料別納租穀三千五百斛隨官符到充位禄
季禄衣服等料云

年料別貢雜物筆廿管零羊角六貝胡桃子一石五斗

例貢御贄青梨子

貢藤十壺並小一升蘇牛羊乳成酪酪
成藤藤成醍醐

復謝絲鹿絲輸絶細為絹
麻為絶

調細ハシヤ絛帛三十疋絹帛六十疋皂帛二十五疋樟帛十疋自餘輸絶

庸輸布中男作物紙熟麻紅花芥子胡桃油鹿脯猪脯

器杖甲一領横刀三口弓六十張征箭四十貝胡蓀四十貝

凡甲斐信濃兩國所進祈年祭料雜弓百八十張甲斐國搦弓八十張
信濃國禱弓百張

並十二月以前差後進上

年料雜藥十二種黃菊花十藍漆斤五人參斤四升麻斤十黃蓍

斤十榧子薯蕷斗各三杏仁斗五葶薈子斗五蜀椒斗三枸杞當

歸各十

交易雜物商布四千一百端履料牛皮三張鹿皮三十張

紫草八百斤鹿革十張猪脂一斗櫻子四合後名鈔曰櫻子音留
同字亦作櫻子音留也

祿物價法甲斐國絹八十束絲八束

運漕雜物功債七十五束

健兒五十人 凡鎮兵陸奥國五百人
出羽國六百八

○倭名鈔所載郷名

山梨郡十

於曾 今存

能呂 今屬八
代郡

林戸 今屬八
代郡

井上 今屬八
代郡

玉井 今之八幡
郷是也

石糸 八代屬
八代郡

表門 概三和戸故或衆戸
敗字ト父ト五韻通 加美 今八上村
ト改

大野 今存

山梨 今存

八代郡五

長江 今ハ永井
改

白井 今白井河
原村也

沼尾 今不詳

川合 今の東河内領
あぶ

八代 今存

巨麻郡九

等力 今遷山
梨郡

逸見 今存

栗原 今遷山
梨郡

青沼 今屬山
梨郡

真衣 今の牧原村
りく

大井 今小林村の邊と
大井の庄と云

市川 今屬八
代郡

川合 今の西河内領
あぶ

餘戸 今不詳概ハ今義解
日滿六十戸者割ナリ云

一里置長一人其不満足家者隸入大村ニ不用別置也云云
餘戸の訓あまうり云々今之甘利村也云々倭名鈔此地名諸國にも多

都留郡七

相模 概ハ今之道志秋山の邊より姓昔相模の国威
ト何きの代ハ甲斐ト屬ト云々郷名に呼ぶ云々

古郡 今不詳概ハ今古河戸
村有長古郡の郷ハ今

福地

今不詳按小福地ふちの假字かん多良余詳カ美按小今上郷と云ハ此遺名なり

征茂

按小今の川茂も川せの二音を借らる後世誤て川茂と唱違へる一
加美ハ上りて征茂ハ下のつら今上郷下郷と云ハ此郷名なり

都留

今の鶴川
村也

予按小郷ハ中古の庄と云類之村ハ其中と有る一今當国

中ノ節とも此類ちん村ハ聚あり群りあつまるの義郷里依も

さともむさハ秋ありとハ処なり今云五十戸為里云

出雲風土記曰郷字者依靈龜元年式改里為郷其郷名字者

被神龜三年民部省口宣改之云今ハ四郡村數凡八百余有

等カ栗原の二郷今巨麻郡小なり却て山梨郡小なり往昔巨麻郡

中今山梨郡に属も又巨麻郡と境を隔も數里あり

一説は等カ栗原二郷往昔巨麻郡に有何もの頃より之は

水も村里田畠悉く流失も其後山梨郡に彼二郷を遷す

と云亦一説風土記錯簡せりと云ハ誤なり風土記倭名

鈔にも巨麻郡は等カ郷同く載れハ錯簡ゆへなり

此外郷名往昔に違所數多有意應仁の頃より慶長の頃迄

百年余りの兵乱其間跋扈の輩已ら民も僭改しりたり或

村民聚り他郷に遷り住村名を改し事あるもハ妻し考

ふちか

○延喜神名式所載神社

甲斐國廿座大一座
小十九座

山梨郡九座並小

神部神社

物部神社

甲斐名神社

黒戸奈神社

金櫻神社

松尾神社

玉諸神社

大井俣神社

山梨岡神社

巨麻郡五座並小

神部神社

穗見神社

宇波刀神社

倭文神社

笠屋神社

八代郡六座大一座
小五座

佐久神社

弓削神社

表門神社

淺間神社大神

中尾神社

榊衝神社

凡二十社考、後以有

○國史及風土記所載式外神社

美和神社

檜峯神社

市川神社

比志神社

當麻戸神社

幸燈大明神

加茂山神社

宮守神社

住吉神社

福地八幡

凡十社考ハ後より

國史及風土記所載神社不載神名式者多予按忌部庶成
所撰古語拾遺曰至天平年中勘造神帳中臣專權任意
捨有由者小祠皆列无縁者大社猶廢云有神社等往昔
忌部家親一神社あり一一文徳實録曰嘉祥四年天下諸神
不論有位无位共叙正六位云

○延喜式所載古驛三

水市今不詳河口今存 加吉按都留郡に古坂と云所有吉古同韻
免れ加吉を後世加古とよまざる由や 各是定
今乃黑駒御坂通是往昔乃驛路也當國ハ東海道ハ屬す

國史ハ觀察使ハ東海道より奉りありし也諸道觀察使を任じし
吏代ハの國史より
拾芥抄の国圖も駿河よりハ 馭傳ハと云ふり今乃諏訪ハの驛路ハ
中古北國より鎌倉ハの通路也往昔ハ東海道富士山と足高山ハ
間を通りし足柄山を越りしを延喜式横走驛ハと云ふ富
士と足高ハの間也

唐令曰諸道須置馭者每三十里一馭若地勢險阻及無水
處隨縁置之云本朝之制ハ唯欽ハ一里ハ六町

○延喜式所載御牧三

拍前牧 甲斐御牧考曰拍前殊不可考然式所載之牧都三

處而穗坂真衣野既在巨麻郡因思之逸見又有櫻山村北與
信界土極勁寒曠遠而多產駒于今州民皆取給焉其稱櫻山
者亦安知其非拍前轉訛乎外是而代郡有拍尾山而黑駒山
值其南駒飼村在其東皆不甚遠蓋前與崎尾共峽同訓而皆
緣山水之稱則以其一帶之地或為古之牧亦不可知也云云
依之按拍尾櫻山乃兩說難分云々恐云々拍尾云々
○真衣野牧 甲斐御牧考曰武川之地有牧原村其駟路屬
倭名鈔有巨麻郡真衣則以其為遺名亦可知矣
東鑑曰建久五年甲寅三月十三日甲斐國武川御牧駒八足

參著被經御覽可被進京都云云

○穗坂牧

甲斐御牧考曰逸見之地見有小笠原村而講有
繫穗坂之號者且村落之通稱有坂上坂下意者穗坂者大者
而所謂小笠原是特稱者耳和歌所詠如互舉其名者然恐不
復為兩牧也云云

凡年貢御馬者甲斐國六十疋

真衣野拍前兩牧三十疋
穗坂牧三十疋

右諸牧駒者每年九月十日國司典牧監若別當之等

信濃甲斐
上野三國

任牧監武藏
國任別當

臨牧檢印共署其帳簡繫齒四歲已上可堪用者調

良明年八月附牧監等貢上若不中貢者便充駟傳馬信濃國不
在此限若

有賣却混正稅其貢上馬路次國各充秣菊並牽夫遍送前所
 其國解主當察付外記進大臣經奏聞分給西察閱定其品
 類聚三代拾日天長四年十月十五日大政官符置甲斐國牧
 監夏右得彼國解稱以此國所領牧與信濃國同頃年蕃息漸多
 繫飼歲倍此壯之數于今千餘而至當監事品秩稍卑按驗馬
 政於事無勢望請準信濃國同置牧監謹請官裁者正三位行
 中納言兼右近衛大將春宮大夫良岑朝臣安世宣奉勅依
 請

文武紀曰四年三月令諸國定牧地放牛馬大室四年三月給

鐵印凡二十三国使印牧駒續

公事根源八月條曰十七日甲斐國總坂御馬牽云云

御牧の事委くハ牧令ヨリ畧之

○國史所載祥瑞

○元正紀曰養老五年正月戊申甲斐國獻白狐

○聖武紀曰天平三年十二月丙子甲斐國獻神馬黑身白髮

尾中畧其獲馬人進位三階免甲斐國今年庸及出馬郡庸調其

國史史生以上並撰瑞人賜物有差云云

○日本後紀曰桓武天皇延曆十三年五月乙未甲斐國獻

白鳥

○三代実録曰 陽成天皇元慶八年十一月五日甲斐国言
 嘉禾生菅山梨郡石永郷正六位上清原真人當仁宅從四位下 豊前守
 其一十三莖五十穗其一十二莖三十六穗云云 予按倭名鈔
 小石永の郷不見恐らくは未だ永と云誤る石永郷あり

○國史前載孝子節婦

○称徳紀曰神護景雲二年五月辛未甲斐国八代郡人小谷
 直五百依以孝所稱復其田租終身

○日本後紀曰 淳和天皇天長六年十月乙丑甲斐国人節

婦上村主万女叙位二級終身免戸田租

○續日本後紀曰 仁明天皇承和十一年五月丙申甲斐國山
 梨郡人節婦伴直富成女勅宣終身免其田租即標門閭旌節
 行其後久々不傳惜心らくは史傳なきこと也近代人の知るる一
 二を舉ぐ

○八代郡南田中村小節婦有其夫頃年癩を病めり享保十三
 年七月大雨中々日川洪水漲り民屋流るる時あがりて果
 皆隣村に逃るる彼婦人其夫を助けもんと夫辭さざる事
 中々惡疾は向つて今幸々以水難くも成さるるの事も傳ふ

婦せられたるに、
死せり時、又其貞烈を感す、
加賀美光章所撰石碣銘文

○巨麻郡乙黒村に孝女有る者、
其母と孝あはれ故を乞とせしめ、
めづる母に順あはれ、
かゝる事、
熟す、
元文四年己未母の齡百歳、

銀穀を給ひ、母の齡を賀、
乙黒孝女傳より

林大學頭
信光所撰

○山梨郡府中横澤町に、
孝女有る者、
其母と孝あはれ、
我身ハ垢ついたら、
小雀、
お月をけ、

○温泉 六ヶ所 香川翁華撰載

鹽山 川浦 黒平 湯駕 下部

奈良田

五雜俎曰温泉之發源其下必有朱砂或硫黃礬石蓋
天地至陽之精所結也瀾中諸泉皆作硫黃氣甚者
薰人不可耐人有疾者浴之輒愈

○甲斐八景 享保年中柳澤侯依奏開勅許

夢山春曙

中院大納言通躬卿

この夢山春曙といふは山のゆかりに花をあたふのゆかりの

龍華秋月

龍華山永廣寺享保年中柳沢侯所建立也在山梨郡岩窪村今廢

武者小膳参議実陰卿

名をわたりてあはれ秋の月や〜と雙の花のゆかりも

富士晴嵐

入江民部権助相朝臣

吹あつたわらしをえき〜のさきもさ〜のさき

惠林廻鐘

外山三位光頭卿

静か〜夕のつゆの〜の〜の池もか〜

石和流螢

日野中納言輝光卿

石和川夜も流の〜の〜の〜の〜

金峰暮雪

久世三任通復卿

